

人生は思い通りにいかないからこそ



文学部長
宇佐美 毅
Takeshi USAMI

中央大学を卒業することになった皆さん、おめでとうございます。皆さんのこれまでの努力が、この大きな花を咲かせたのだと思います。皆さんを支えてきたご家族やお友だち、先生方にもあわせてお祝いの言葉を申し上げます。今、皆さんが持っている気持ち、晴れやかで希望に満ちたその気持ちを、どうかこれからも大切にしていってください。

ただ、そのお祝いの時に、いささかふさわしくないこともお伝えしようと思います。それは、皆さんが今心の中に持っている夢や願いの多くは、叶うことがないかもしれないということです。「夢はあきらめなければいつか叶う」とよく言われますが、本当にそうなる人もいれば、そうならなかった人もまた実際には多くいるはずです。

しかし、自分が考えている通りにならないことがあっても、それを受けとめて前に進もうとするからこそ、皆さんの人生は大切で価値のあるものなのです。ゲームであればリセットしてはじめてやり直すこともできるでしょう。しかし、皆さんの人生にリセットボタンはありません。だからこそ、思い描いた通りにならないときには、この中央大学のことを思い出してほしいのです。

皆さんがこの4年間で学んだことは、単なる断片的な知識や、本の中だけに閉じられた知恵ではなかったはず。皆さんは、講義、ゼミ、レポート、試験、合宿、フィールドワーク、研究発表、論文制作等々を通じて、課題発見能力、文献読解能力、プレゼンテーション能力、問題解決能力などを鍛えてきました。また、それらの研究活動や課外活動を通じて、多くの人と接し、その中でコミュニケーション能力を鍛え、人とかかわりながら考えることの大切さを学んできました。

この中央大学で学んだそれらの能力、育んだ人間関係は、既に終わった過去のものではなく、皆さんのこれからの人生を豊かにするためにあります。それらを総動員すれば、皆さんの人生を一步ずつ前に進めていくことができるとは限りません。自分の人生が思い描いていた通りにいかないその時にこそ、皆さんがこの中央大学の卒業生であることを思い出してください。そこで何ができるのか。それこそが皆さん一人一人の真価なのだと思います。

専門性と人間性



総合政策学部長
堤 和通
Kazumichi TSUTSUMI

昨年末に『否定と肯定』という映画が公開されました。歴史の修正主義者から名誉棄損で訴えられた米国の歴史学者の法廷闘争を描いた実話ベースの映画です。米国の歴史学者はホロコーストを専門としていますが、その著書が自らの名誉を棄損したとする、ホロコーストの史実を否定する論者(修正主義者)がイギリスの裁判所に提訴したのに対し、米国の学者がその訴えを争い、イギリスの弁護士とともに闘います。訴えられた被告は、自らが法廷で証言し、あるいは、生存する体験者が証言台に立つことを望みますが、原告の歴史観に焦点を合わせるという弁護方針と、証言台で原告からの反対尋問で体験者に恥ずかしめをうけさせないという判断から、依頼人である被告の要望は受け入れられません。原告は手ごわく、法廷で傍聴する体験者を苦しめ、被告もその苦しみを知り苦悩します。それでも、粘り強い被告弁護団の主張立証が最後には受け入れられます。

皆さんが学部で学んだことには高度の専門性があります。時として専門性に閉口することもあったかもしれませんが、しかし、『否定と肯定』は、専門の知見を最大限活用することで、一見、当然の人間の思いや情感に反することが起きるようみえて、それが、最後には人間性に適う結果に至る、という側面を描いているようにわたしには思えました。

もうひとつ、この映画で弁護士が依頼人とアウシュビッツに向かう場面があります。同行を乞うとき、弁護士は、自分には法曹としての経験があり腕もある、しかし、法廷で勝ち抜くには「欲(appetite)」が要る、と言います。これは、自分のしていることが正しいという判断だけではなくて、正しいことであるからそれを希求するという自分を突き動かす情動が要る、と言っているように思えます。弁護士は、アウシュビッツを訪れて恐れと恥を感じたと話します。弁護士は自身の気持ちから、歴史をゆがめてはならない、という思いを弁護活動の芯に据えたのだと思います。専門的に筋が通り、さらには、人間性に適ったことを貫くときに、やはり、熱い思いというのが要ることが描かれているようです。

学部で学んだ専門分野、身に着けた知見に自信を持ってください。それには知恵の裏付けがあり、慢心は禁物ですが、人間性に適った結末に近づく方途であるでしょう。加えて、「欲」を忘れずに、情熱をもって役割を果たして下さい。ご活躍を祈念しています。